

# 実践から作成する表現遊び指導案（Ⅱ） －既成の遊びのレシピを活用する－

池田 敦子・佐々木 昌代

## A Teaching Plan for Young Children's 'Expression Play' based upon Current Practice (Ⅱ) － Using Established Play Recipes －

Atsuko IKEDA, Masayo SASAKI

### I. はじめに

本研究は、子ども達にもっと表現遊びを楽しんでもらいたい、保育者や学生にもっと表現遊びを実践の場で生かしてほしいとの思いから、保育現場と連携して取り組んでいる。

前稿（Ⅰ）では、保育指導案を書くことに対して「習っていない」「書いたことがない」として苦手意識を持っている学生も容易に実践できるように、指導案モデルも添えて「動物になってみよう!!」「音を聴き分けて身体で表現してみよう!!」の保育指導案を提案した。指導案モデルは、具体例を示すとともに、ねらいは基本的に子ども達に身に付けてほしいことであるため抽象的な表現になる、内容はねらいを具体的に表したものであるため保育者が活動の中で子ども達にもっとも関わっていききたいことである、環境構成は子どもも保育者もスムーズに活動できるように事前に整えておくべきことであるから子どもや保育者の配置や教材・教具の準備状況などを書くだけでは不十分である、といった保育指導案作成上の枠組みも掲げた。保育指導案については、「保育指導法Ⅲ（身体表現）」の授業内容として指導案モデルとともに取り上げた。受講した学生達からは、研究紀要の別刷を参照して幼稚園教育実習の研究保育などで試みたといった報告を受けた。

本稿（Ⅱ）では、保育所・幼稚園に招かれて子ども達を楽しませたり、保育士、幼稚園教諭、保育者を目指す学生などに子ども達を楽しませるための研修を行ったりすることを職業としている専門家が考案し、子ども達や保育現場に拡く親しまれている既成の表現遊び（以下、既成の遊びとする。）を積極的に活用することを提案する。即ち、東日本大震災支援コンサートを切っ掛けに始まったあきらちゃん&ラーメンちゃんとの交流によって考えさせられたこと、気付いたこと、工夫したことから、既成の遊びを保育現場で活用する意味と活用の仕方について述べる。

### II. 既成の遊びを活用するということ

#### ① 創り出す遊びに拘らない

これまで、作曲と創作ダンスを専門領域とする筆者らは、授業や現職対象の保育研修会で提案したり保育所・幼稚園で子ども達を指導したりするときの表現遊びは自ら創り出したオリジナルもしくはそれに準じるものであるべきだと考えてきた。また、保育現場ではダンスの振り付けが施されたCD

などの既成の遊びが安直に取り入れられているのではないかとの疑問も持っていた。しかしながら、学生達や子ども達と一緒に『秘伝ラーメンたいそう』などで保育現場に拡く知られたあきらちゃん&ラーメンちゃんのコンサートを実際に体験すると、非常に楽しく、子ども達の遊びのスペシャリストならではの発想の豊かさと遊びを展開する技術の巧みさに、自分達も保育所や幼稚園で子ども達と彼らの遊びを使って遊んでみたいと素直に思われた。

子ども達の表現遊びを充実させるのに、創り出した遊びによるか既成の遊びによるかは関係ない。遊びの場で主体性が問われるのは、遊びを考案した者や遊びを指導する者ではなく、遊び手である子ども達である。子ども達に体験してもらいたいこと、気付いてもらいたいことが含まれているなら、自ら創り出した遊びも既成の遊びも隔てなく活用すべきということである。

あきらちゃん&ラーメンちゃんの‘あそびうた’コンサートで如何にも楽しそうに弾ける子ども、学生、保育者、親子の姿には説得力があった。あきらちゃんのエレクトーンやギターに合わせて思いっきり踊ったり歌ったり、ラーメンちゃんの話術や動きのパフォーマンスにじっと聴き入ったり全身で笑い転げたりして表現遊び(あきらちゃん&ラーメンちゃんにとっては‘あそびうた’)に夢中になる姿には、筆者らも自ら創り出す遊びに拘らなくて既成の遊びを活用することについて考えさせられた。同時に、保育者が既成の遊びを安直にはなく積極的に取り入れていることの理由も理解できた。自分が楽しく遊べたので、子ども達にも楽しく遊んでもらいたいということである。

## ② 遊んでみて活用する

あきらちゃん&ラーメンちゃんによる保育者を目指す学生を対象とした(東日本大震災支援)コンサート、学園祭企画として保育所・幼稚園の子どもと保護者を招待したコンサート、保育実習に向けた授業(実技指導)を体験した学生の中には、彼らの‘あそびうた’CD、レシピ本(遊び方の説明書集)、紙芝居、楽譜などをすすんで購入し、保育所実習の研究保育に活用した者が少なからずいた。しかも、体験したそのままではなく、学生なりに子どもの姿・発達段階に則して指導案に工夫を凝らして実施したという。子ども達は大喜び、参観の保育士の先生方にはたいへん褒められたことを満面の笑みで報告に来てくれた学生は、あきらちゃん&ラーメンちゃんの‘あそびうた’に出会う機会を得られたことへの感謝の言葉も添えてくれた。

このような事例に学生達の購入要望もあって、図書館にあきらちゃん&ラーメンちゃんの‘あそびうた’CDとレシピ本コーナーを設けた。そこで、実習時や就職後に積極的に活用してもらいたいと考え、保育指導法Ⅲ(身体表現)の授業で模擬保育の課題とした。授業の初めに次項に掲げる‘あそびうた’を用いた表現遊びを行い、目的(子ども達に気付いてもらいたいことや体験してもらいたいこと)を明確にして‘あそびうた’を選び、目的を達成するために選んだ‘あそびうた’をどのように活用するか考えて簡単な表現遊びの指導案をグループで作ってくることを課題とした。

コンサートのイメージから楽しい遊びを期待したが、考えてきた指導案に従って模擬保育を行ったところ、保育現場で子ども達と遊んでみたいと思われる指導案は少なかった。実際に遊んでみて選んだのではなくレシピ本に目を通しただけで‘あそびうた’を選んだようで、選んだ‘あそびうた’のここが楽しくて活用したいと考えたといった学生達の思いがみえない、目的意識が希薄な指導案が目立った。このとき、既成の遊びを認めて紹介するだけでは不十分だと反省させられた。筆者ら自身があきらちゃん&ラーメンちゃんのコンサートを楽しんだことから既成の遊びへの抵抗感を払拭したよ

うに、授業の中で実際に既成の遊びで遊んで、学生達にも楽しいと実感してもらうことが必要だったのである。また、既成の遊びの発案者が意図することや子ども達と遊ぶときにどのように扱ったらよいかということなども伝えることが大切だと考えていたが、あきらちゃん&ラーメンちゃんの‘あそびうた’の楽しさを体験した学生が実習の研究保育で‘あそびうた’を自分なりに工夫して子ども達を楽しませることができたように、授業では、遊びの内容や方法を学生達に理解させることよりも、この遊びは楽しい、この遊びを使って子ども達と遊びたいと学生達が思えるようにしっかり遊ぶことがより大切だったのである。

このことは、自ら創り出した遊び、伝承的な遊び、保育現場に取材した遊びを授業内容として取り上げるときにも忘れてはならないことである。保育知識を理解する、保育技術を習得するというところに留意して授業で学生達に何を学ばせるかにもっとも苦心するが、表現遊びを題材とする以上、表現の授業では遊ぶという行為を通して学ぶということを既成の遊びを授業で取り上げたことから再確認できた。

子ども達も、楽しかった遊びはまた遊びたがる。例え、初めは保育者から教えられた遊びであっても、子ども達がすすんで遊び出すと主体性を発揮して自分達で遊びを工夫して遊び込み、遊びを膨らませていく。況してや、保育者を目指している学生達である。授業の中で遊んで楽しければ、自ずと工夫を施して子ども達と遊ぼうとするはずである。

### ③ そのまま遊ぶことから

授業の課題とした模擬保育が楽しい遊びにならなかった理由に、初めからアレンジしてしまったということがある。あきらちゃん&ラーメンちゃんの‘あそびうた’は、遊び慣れたら自由にアレンジして遊びを広げられるようになっていく。しかし、あくまでも遊び慣れてから、遊び込んでからアレンジすべきである。‘あそびうた’を本来の形のままで遊ぶ前に、いきなりアレンジして新しい遊びにしてしまうと、本来の遊びの楽しさが損なわれてしまう。況して、アレンジすることを遊びの内容にして遊び手である子どもや学生に創る行為を求めると、遊びから外れてしまう。

まずは、そのままの形で既成の遊びを楽しみ、それからアレンジして遊ぶことを楽しむことが肝要である。以下に、具体的な活用には説明する。

#### 動いてあそぼ！『はなれないふたり』 ※資料1. 参照

手遊びバージョンとダンスバージョンがある。手遊びバージョンでは、「右手ちゃんと左手ちゃんが仲よくちゅっちゅっちゅっ、離れない、離れない、離れないふたり。」と歌いながら、左右の掌を順に出し、左右の掌を正面に向けて顔の前で大きく振り、掌を合わせて3回たたき、合わせた掌を身体を揺すりながら左右に動かし、最後に二本指を立ててピースサインの要領で右手を高く挙げてポーズを決める、という基本パターンをもとに「右手ちゃんと左手ちゃん」のところを「お父さんとお母さん」「右からへび、左からへび」「右からゾウ、左からゾウ」「右から卵、左から卵」「右から鉛筆、左から鉛筆」「右から自動車、左から自動車」などと変化させて遊ぶ。手遊びを楽しみながら、お父さんとお母さんは「ふたり」、へびは「2匹」、ゾウは「2頭」、卵は「2個」、鉛筆は「2本」、自動車は「2台」と数え、人、動物、事物の数え方にはいろいろあるということに子ども達は気付いていく。「両手とほっぺた」「両手と膝」などと手と体の各部位を組み合わせていくと、楽しく身体を動か

しながら身体意識を高め、身体部位の名称にも気付ける。

ダンスヴァージョンは、2人組で向かい合って遊ぶ。掌を合わせて3回たたき合うところは互いの掌をハイタッチの要領でたたき合い、決めポーズのところはハグをしたり互いの手を繋いで輪をつくったりする。パートナーチェンジをしているいろいろな相手と踊ることを楽しんだり、掌をたたき合うところから決めポーズまでを2人組で自分達らしく工夫する（動きを考える）ことを楽しんだりできる。同じ動きでも向かい合う相手によって違った感じの踊りになるので、違いに気付きながら他者の動きに合わせて踊るということが体験できる。決めポーズを2人組で工夫すると、他者と協力するということが体験でき、互いの工夫（考えた動き）を見せ合うと、他者の発想の多様さにも気付くことができる。さらに、パートナーチェンジをするときに、歩く、走る、スキップ、ツーステップなどの移動の動きを入れていくと、運動量が大きくなり、より遊びに集中していく。

留意点は、手遊びヴァージョンの基本パターンを何度も繰り返し楽しむこと。ヘビが出てきたら、掌を合わせるときに「ガブツ」と言って片方の手でもう一方の手を掴んでヘビが他のヘビを飲み込むような動きをしたり、卵が出てきたら、ピースの手を高く挙げないで頬に寄せて「ニコッ（2個）」と笑って見せたり、といったパターン崩しも混ぜながら基本パターンでじっくりと遊び込む。ただし、パターン崩しは基本パターンの繰り返しがあって生きる。子ども達も繰り返しを楽しんでこそ「ガブツ」「ニコッ」に反応して笑う。このようにして手遊びヴァージョンでじっくり遊んでおくと、ダンスヴァージョンにも無理なく移っていけるが、2人組になっても、全員が同じ動きを十分に楽しんでから自分達らしく動きを工夫するようにしていく。

#### みんなであそぼう！『ひげひげずのシアワセきぶん』

あきらちゃん&ラーメンちゃんのコンサートでは、普段は自分からすすんで踊りそうにない男性の園長先生やお父さん達が踊る。と言うより、あきらちゃん&ラーメンちゃんにかなり強引に舞台上に呼び集められて踊らされる。右手、左手、右肘、左肘、右足、左足を順に反対の手（右手、右肘、右足のときは左手）で指さしながら上下に動かし、左右を合わせて上下、左右に振り動かし、最後に勢いよく右手拳を突き上げる。極めて簡単な動きだが、踊り慣れないお父さん達がごちなく踊ると見栄えがするように創られているダンスで、子ども達の大喝采を浴びる。手や肘を上下するたびにお父さん達の長い脚の膝が割れてがに股が撓み、大爆笑が起き、会場の雰囲気が一気に盛り上がる。

保育所や幼稚園の発表会、運動会で参観に来られるお父さんや男性保育者に踊ってもらったら、子ども達がどんなに喜ぶことか、想像しただけで楽しくなる。また、覚える手間を掛げずにパッと踊れるので、手遊びをするように子ども達と遊ぶことができる。よって、筆者らはこのダンスは子ども達に踊る楽しさや身体を動かすことの心地よさを体験してもらえる遊びと捉えていた。ところが、保育所実習の研究保育でこのダンスを使ったという学生は、ちょっと難しいダンスのウォームアップとして活用したというのである。子ども達に動きを説明して覚えてもらうときに保育者と子ども達が向かい合って鏡に映るように動くミラーモーションを使うが、この『ひげひげずのシアワセきぶん』を踊りながら子ども達に自分とのミラーモーションに慣れてもらったという。しかも、右手、左手、右足、左足といった身体部位の意識も高めて、言葉による説明にも間違えずに反応できるように導き、ちょっと難しいと思われたダンスの動きも子ども達は容易に覚えてくれたという。当然ながら、子ども達は大喜び、研究保育は大成功だったとのこと。

学生には教えられた。主活動の導入として、子ども達の興味関心を高めて集中して活動に取り組めるように手遊びを行うことが得意な学生には、このダンスを手遊びのように導入的に使うということは自然な発想だったのかもしれない。あきらちゃん&ラーメンちゃんも、この『ひげひげーずのシアワセきぶん』を冗談めかして手あそびと呼んでいる。雰囲気が一気に盛り上がる楽しいダンスと筆者らは受け止めたが、学生は一気に盛り上がったので心と身体を高揚させられるウォームアップのダンスと感じ取った。筆者らの受け止めは遊びの外側からのものであるが、学生は遊びの内側から主体的に感じ取ったのである。実に素直にこの遊びの楽しさを学生は捉えていた。

この‘あそびうた’と学生の実践から、指導する保育者目線ではなく遊びの主体である子ども目線で遊びを体験すべきであることを教えられた。既成の遊びに出会うときは、保育現場や授業で使えそうかとかどう使おうかなどとは考えず、子どものように遊びに没頭するということである。

### みんなであそぼう！『春るんるん』

レシピ本に「並んで座りながらおとなりの友達と仲良くなれるあそび」とある。学園祭企画のコンサートで筆者らも「仲良くなれるあそび」を実感した。「先生達は子ども達のお手本になりましょう」とあきらちゃん&ラーメンちゃんに促され、コンサートに参加していた教員全員がステージ前面に手を繋いで座った。同僚と手を繋ぐなど初めてのことである。誰の隣に行こうかなどと選ぶ暇もなく、手遊びが始まった。楽しかった。それ以来、手を繋いだ同僚とは親しみが増した気がして、朝の挨拶をするときなど顔が綻ぶようになった。

歌詞にも興味を引かれた。春は桜、夏は花火、秋はお月様、冬は雪景色と季節ごとのきれいなものを歌っていく。子ども達に季節の移り変わりを気付かせることができるように思われた。季節ごとに咲く花、季節ごとにおいしい食べ物、季節ごとに楽しみたい遊び、季節ごとに巡ってくる行事など、子ども達と考えながら歌っていったら楽しそうである。

授業と保育園で遊んでみた。授業では、基本パターンで遊んでから、グループに分かれてそれぞれが四季の花、食べ物、行事などを選んで歌をアレンジし、見せ合った。グループごとの発想は面白く、手の動きを巧みにアレンジしたグループは他のグループから「真似したい」と評価された。授業で楽しくできたので、保育園年長児クラスでも同じような手順で遊んだ。歌をアレンジするところは、クラス全体で、春はどんな花が咲くかな、夏に楽しみな遊びは何かな、秋のおいしい食べ物は何かな、などと問いかけて子どもの意見を取り上げ、アレンジしていった。子どもの発想は豊かでユニークな歌ができたが、遊びとしては盛り上がらなかった。子ども達には、季節より「仲良くなれるあそび」で楽しむべきであったが、たまたま学生達と授業で楽しく遊べたことで子ども目線で遊びを捉えることを怠ってしまった。

『春るんるん』は『はなれないふたり』などと比較すると、幾分か難しい手遊びである。繰り返し遊んで、覚えるということが必要になる遊びである。しかし、この遊びは覚えようとして繰り返すところにも創り手の意図が働いているように思われる。繰り返すたびに手を繋ぎ、手を繋いだまま腕を振ったり、肩をたたきながら顔を覗き込んだりして、仲良くなるために何度も繰り返すように難しくしてあるかのようである。授業でも、学生達は基本パターンを覚えようとして、アレンジした歌を完成させようとして、何度も手を繋いで繰り返していた。歌がない間奏の部分では口伴奏まで付けて、繋いだ手を殊更リズムカルに大きく動かしていた。学生達は、アレンジすることより、繋いだ手を歌



に乗って振ることをより楽しんでいたのである。楽しい既成の遊びは楽しく遊ぶことに徹して、子ども達から表現や考えを引き出すことを急がないことである。保育園で失敗して、振り返ることができた。

### 手遊び『シシカバブー』

シシカバブーは中東地域などで食べられている肉、魚、野菜などを焼いた料理のことである。日本語にして分解すると面白い言葉だとの発想から、あきらちゃん&ラーメンちゃんが手遊びにしたものである。シシはらいおんで、鬣のように顔の横で両掌を広げる表現をする。カバはかばで、大きな口を開けたように両手で上下から物を掴むような表現をする。ブーはぶたで、指で押さえて鼻の穴を上向きにしてぶたの鼻を表現する。この3つの表現を「シシ、カバ、ブー」と言いながら3回繰り返して、両手を回繰り返させながら「ウーッ」と唸り、3つの動物のうち1つを表現する。例えば、シシなら、「ウーッ」「シシ」と言って鬣のように顔の横で両掌を広げる表現をする。何回か繰り返してパターンを覚えたら、保育者は言葉と表現を異なるものにしていく。子どもは、保育者の表現に惑わされず、保育者の言葉によって表現できたら「よくできたね」ということになる。

学生達と遊ぶときはこの戸惑わせるやり方が楽しいが、保育園の子ども達と遊んだときは勝手が違った。保育園では、年長児だったが、戸惑わせないやり方が楽しめた。言葉と表現は一致させたままでゆっくりからスピードアップしたり、表現の大きさを変化させたりする方が子ども達は喜んでくれた。そして、何度か繰り返して遊びに慣れると、子ども達は当たり前のように表現を膨らませていった。シシなら、鬣の表現をするだけでなく、ガオーと吠えたり獲物があるかのように飛び掛かったりした。カバなら、口を表している両手を大きく動かしたり重い荷物を抱えたように動いてカバの胴体を表そうとしたり、ブーなら、鼻を指で押さえたまま上体を低くして臭いを嗅ぐようにしたりブヒブヒと鳴き声を出したりした。意図して引き出さなくても、遊びが楽しく遊びに没頭していくと、子ども達はもっと遊びを楽しくしようと自然に工夫するということである。

このような子ども達の自然な表現から既成の遊びをアレンジして自分の遊びとしていきたいものである。そのためには、予断なく既成の遊びで保育所や幼稚園の子ども達と遊び込むことである。

### Ⅲ. 既成の遊びを活用するために

#### ① ピアノを使って

既成の遊びを学生や保育者にもっと活用してもらうためには、前稿（Ⅰ）に倣って、子ども達から表現や考えを引き出すためのアレンジを急がないで、既成の遊びをそのままじっくり遊び込めるような指導案モデルを提示したいところであるが、保育現場での遊びの実践が不十分である。よって、本稿（Ⅱ）では、ピアノを使って既成の遊びを活用することについて述べる。

既成の遊びにはCDがある。CDを使って子ども達と遊ぶと便利のように思われるが、実際には不便なこともある。CDは、子どもに合わせてスピードを変えられない。子どもが戸惑うところを丁寧に繰り返そうとしても、CDは待ってくれない。やはり、子どもの動きに合わせて音を出せるピアノが便利である。あきらちゃん&ラーメンちゃんもCDではなく、ギターとエレクトーンを使っている。言葉掛けをしながら子どもの動きに合わせて演奏できるなら、ギター、エレクトーン、アコーディオンなどでもよいが、どこの保育所・幼稚園にも設置してあるピアノを使いこなせるに越したこと

はない。

例えば、前項で掲げた『はなれないふたり』は、手遊びバージョンも、ダンスバージョンも、CDを使ったのでは思うように遊べない。右手と左手から出てくる動物や事物に応じて、歌い方は言うまでもないが、ピアノで調性やリズムを変化させると楽しい。また、ピアノで速くしたりゆっくりしたり、段々速くしたり急に止まったりすると、繰り返しが単調にならず、子ども達がより遊びに集中する。特に、ダンスバージョンで2人組になって、パートナーチェンジしたり、自分達らしく動きを考えて工夫したりして遊びを発展させていくには、どうしても子ども達の動きに合わせて音を出していかなければならない。

『ひげひげーずのシアワセきぶん』も同様である。CDを掛けてサッと丸ごと通して踊ってしまってもよいが、最初に踊るときは「右の方からやって来たやつの名前は」「左の方からやって来たやつの名前は」のところで一旦止めて、「何かな」と子どもに問いかけ、正解（歌詞通りの「右手」「左手」「右肘」「左肘」「右足」「左足」）が出たら続きを踊っていくというように進めると楽しい。保育者が歌って遊びを進めることもできるが、ピアノも加わるとよりスムーズに遊べる。

『はなれないふたり』『ひげひげーずのシアワセきぶん』に限らず、既成の遊びの活用にあたってはCDよりもピアノを有効に使いたい。遊び初めのときは遊びにメリハリを付けて子どもを惹き付けたり、子どもが遊び慣れて遊びをアレンジするときは子どもそれぞれの動きに合わせてその発想を助けることができるので、ピアノ演奏は苦手だとする学生や保育者には子ども達をもっと楽しませようとの目的意識を持ってレッスンに励んでもらいたい。

## ② 楽譜を添えて ※資料2.～資料7. 参照

‘あそびうた’のレシピ本には、保育者が歌ったり楽器を使ったりして子ども達と遊べるように、楽譜も添えられている。しかし、‘あそびうた’を活用した模擬保育の発表で、CDではなくピアノを使ったグループは、6クラスで30以上ものグループがある中、わずかに2グループであった。ピアノを弾くのは苦手だとする学生が多いこともあるが、苦手でなくても弾けないのだという。レシピ本の楽譜には、右手の旋律は載っているが、左手の伴奏はコードしか載っていない。コードから伴奏音を考えて実際に演奏できる学生は極少ないのである。伴奏が分からないので、ピアノが弾けない。弾けないから、ピアノは使えない。やむなく、CDを使うということになる。

コードから伴奏音を考えられないので弾けないというのは、‘あそびうた’の模擬保育に限らない。前稿（I）で扱った「音を聴き分けて身体で表現してみよう!!」を授業で行うとき、クラスで一番ピアノが得意だと他の学生達から目されている学生に、事前に授業内容と伴奏曲について説明し、楽譜を渡して練習してきてもらうようにしている。以前は、授業内容を説明するだけで、学生が選曲して練習してきてくれた。もっと以前は、その場で依頼しても、きちんと伴奏してくれる学生もいた。今は、楽譜を渡して具体的に指示しないと伴奏してもらえない。その楽譜も、コードだけの伴奏のものを渡すと、器楽担当の教員の指導を受けて伴奏を仕上げに来てくれる学生もいるが、できなかったので別の曲にしたと言ってくる学生もいる。別の曲でも授業内容にあった曲であればよいが、4拍子の伴奏を依頼したのに3拍子の曲を準備してきたりする。弾けない学生が増えただけではない。ピアノを相当に弾きこなせる学生も、コードが書いてあるだけでは演奏ができない、表現内容に相応しい曲を選択することも難しいという状況である。

さらに、保育所や幼稚園に勤務している現職の保育者を対象に『はなれないふたり』などの既成の遊びも取り上げて実施した表現遊びの保育研修会では、実際に子ども達と遊んでみたいので楽譜がほしいとの要望が出された。レシピ本を紹介したが、研修で弾いていた通りの楽譜がほしいとのことであった。そこで、『はなれないふたり』の指導で弾いた伴奏を楽譜に起こした。簡単で弾きやすいものと練習しないと弾きこなせないものにした。加えて、『はなれないふたり』のダンスバージョンのパートナーチェンジの指導で弾いたスキップ、走る、歩く、ゆっくり歩くについての伴奏も楽譜に起こした。これは「音を聴き分けて身体で表現してみよう!!」を始め、表現遊びのいろいろな場面で活用できる。

この楽譜は、保育研修会に参加された保育所・幼稚園（認定こども園）から保護者（親子）を対象とした表現遊びの園内研修を依頼された際に、早速活用した。伴奏を担当される保育者に事前に楽譜を送付して、保護者や子ども達の動きに合わせてピアノを弾いてもらうことができた。研修会が楽しいものになっただけでなく、研修会で取り上げた表現遊びを園の行事で実践して参加者に喜んでもらったとの報告も受けた。これから、表現遊びの保育指導案を提案・作成する際には、指導案モデルとともに楽譜も添えることとしたい。

#### IV. まとめ（今後の課題）

仙台を拠点に保育所、幼稚園、小学校の子ども達や家族向けの‘あそびうた’（表現遊び）コンサート、保育者や保護者を目指す学生を対象とした研修会を全国的に展開するとともに、保育雑誌などに表現遊びの執筆を行っているあきらちゃん&ラーメンちゃんとの交流から得られた、既成の表現遊びを保育現場や授業で活用する意味と活用の仕方について記述した。

- ・彼らの楽しいコンサートに触れて、既成の遊びを用いることへの抵抗感がなくなった。既成の遊びを保育者が積極的に用いる理由も了解できた。
- ・既成の遊びのオリジナルなよさを尊重し、子ども目線で、じっくり遊び込むことから既成の遊びを活用する視野が開ける。
- ・既成の遊びには楽譜が添えられていても、一般にはメロディーだけしか書かれていないので、伴奏をコードから自分で考えなければならない。保育指導案にも言えることであるが、そのままピアノを弾ける楽譜が求められる。

今後は、主に保育現場での実践を積み重ね、指導案モデルとそのまま弾ける楽譜を添えて、既成の遊びを活用した保育指導案を提案していきたい。

#### 参考文献・資料

- 1) 佐々木昌代、梅木光子、池田敦子著『実践から作成する表現遊び指導案（I）－保育者の配慮を理解する－』宮崎学園短期大学紀要第3号 139-149頁 2011年
- 2) 無藤隆監修『事例で学ぶ保育内容 領域表現』萌文書林 2007年
- 3) 『オマチマン&あきらちゃんのあそびうたいっぱい はい！タッチ』アトリエ自遊楽校
- 4) 『あそびのレシピ3. ぐ～・ピース・ぱっ！』アトリエ自遊楽校
- 5) 『あそびのレシピ4 くるくるミラクル大作戦』アトリエ自遊楽校
- 6) 『あそびのレシピ5 アケヨル』アトリエ自遊楽校





資料2. 『はなれないふたり』伴奏（簡易）

## はなれない ふたり

The first system of musical notation consists of two staves. The upper staff is in treble clef with a key signature of one sharp (F#) and a 4/4 time signature. It contains a melody of eighth and quarter notes. The lower staff is in bass clef with the same key signature and time signature, featuring a simple accompaniment of chords and single notes.

The second system of musical notation includes lyrics in the upper staff. The melody continues from the first system. The lyrics are: みぎてちゃんと ひだりてちゃんが なかよく ちゅっちゅっちゅっ. The lower staff continues with the accompaniment.

The third system of musical notation includes lyrics in the upper staff. The melody continues from the second system. The lyrics are: はなれない はなれない はなれない ふた り. The lower staff continues with the accompaniment.

資料3. 『はなれないふたり』伴奏

## はなれない ふたり

The first system of the piano accompaniment consists of two staves. The right hand (treble clef) plays a melody of eighth and quarter notes, while the left hand (bass clef) provides a rhythmic accompaniment with chords and moving lines. The key signature has one sharp (F#) and the time signature is 4/4.

The second system features a vocal line with lyrics written below the notes. The lyrics are: みぎてちゃんと ひだりてちゃんが なかよく ちゅっちゅっちゅっ. The piano accompaniment continues in the bass clef.

The third system continues the piano accompaniment. The right hand plays a melody that includes the lyrics: はなれない はなれない はなれないふた り. The piece concludes with a double bar line.

資料4. スキップで 伴奏

Musical score for '資料4. スキップで 伴奏'. The score is written for piano in G major and common time. The right hand features a melodic line with eighth-note patterns and some chromaticism. The left hand provides a simple accompaniment with chords and single notes.

Piano accompaniment for '資料4. スキップで 伴奏'. The right hand has a whole note chord in the first measure, followed by a half note chord in the second measure, and a whole note chord in the third measure. The left hand has a half note chord in the first measure, followed by a whole note chord in the second measure, and a whole note chord in the third measure.

資料5. 走って 伴奏

Musical score for '資料5. 走って 伴奏'. The score is written for piano in G major and common time. The right hand features a fast, rhythmic melodic line with sixteenth-note patterns. The left hand provides a simple accompaniment with chords and single notes.

Piano accompaniment for '資料5. 走って 伴奏'. The right hand has a whole note chord in the first measure, followed by a half note chord in the second measure, and a whole note chord in the third measure. The left hand has a half note chord in the first measure, followed by a whole note chord in the second measure, and a whole note chord in the third measure.

資料6. 歩いて 伴奏

Musical score for '歩いて' accompaniment, measures 1-4. The score is in G major (one sharp) and common time (C). The right hand features a melodic line with eighth notes and a slur over the first three measures. The left hand provides a steady accompaniment with quarter notes and rests.

Musical score for '歩いて' accompaniment, measures 5-6. The right hand has a whole note chord in measure 5 and a whole rest in measure 6. The left hand has a quarter note in measure 5 and a whole note in measure 6.

資料7. ゆっくり (大きく) 歩いて 伴奏

Musical score for 'ゆっくり (大きく) 歩いて' accompaniment, measures 1-4. The score is in G major (one sharp) and common time (C). The right hand has a melodic line with half notes and a slur over the first three measures. The left hand has a steady accompaniment with chords and quarter notes.

Musical score for 'ゆっくり (大きく) 歩いて' accompaniment, measures 5-6. The right hand has a whole note chord in measure 5 and a whole rest in measure 6. The left hand has a quarter note in measure 5 and a whole note in measure 6.



